

---

# 美少女戦士ヨシコ

光太郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

美少女戦士ヨシコ

### 【Nコード】

N5259L

### 【作者名】

光太郎

### 【あらすじ】

私立グリセリン小学校には、だれもが知る、しかしだれも知らない、『秘密』がある。グリセリン小学校に転校してきた一郎が目にした、秘密とは！？ タイトルからモロバレ感漂いつつの勢いだけコメディ

私立グリセリン小学校。

この小学校には、だれもが知る、しかしだれも知らない、『秘密』がある。

\*

「好きです、つ、つ、付き合ってください!」

一村一郎は、うわずった声で、それでもはつきりと思いを告げた。告げられたのは、グリセリン小学校でも有名な美少女、花水木ヨシコ。体育館裏に来るまでは笑顔のはずだった彼女は、高い位置で二つに結んだ髪をちらりと揺らして、困ったような顔をした。

その表情だけで、一郎には今後の展開が見えた。はつきりと、明確に。

それでも、いまさら引くわけにはいかない。

「ゴメン、あたし、一郎くんとは付き合えないよ」

予想通りの答えが返ってきて、一郎はヒザをつく。ショックではあるが、こうなるような気はしていた。

わかっていても、伝えたい思いだったのだ。

親の仕事の都合で、転校を繰り返すこと八回。五年生にして、初めて恋。

またいつ、転校になるかわからない。それならば思いを告げようと、かたく決意していた。

「ど、どうしてですか」

ブロークンハートを押さえつつ、問う。ついでに、簡単にはあきらめない決意もかためていたのだ。

「あたし、秘密があるの。誰にもいえない秘密。お付き合いなんて、できないよ」

「秘密」

一郎は、口の中でつぶやいた。

グリセリン小学校には、『秘密』があるらしいという噂は耳にしていた。だれもが知るものの、知らないことになっている、公然の秘密というやつらしい。

転校して間もない一郎には、それがなんなのか知るよしもない。クラスメイトや先生たちに聞いたところで、知らないの一点張りだ。それが、この美少女に関係あるのだろうか。一瞬そんな考えがよぎるが、さすがにそれはないだろうと思いつく。

「秘密なんて、気にしないです。あの、ボクのこと、キライですか？」

一郎は、なおも食い下がった。しつこいと嫌われるとか、ウザがられるとか、そういう思考はなかった。押せ押せ一本勝負。

ヨシコは、首を振った。

「キライだなんて、そんな。むしろ……」

言葉を切り、いい淀む。一郎の目には、漂う甘い空気が見えたよう気がした。

キライではなく、むしろ。とくれば、答えはひとつしかないではないかと、否応なく期待が高まる。

しかし、続きは声にならなかった。

「きやー！」

けたたましい悲鳴が、体育館裏まで届いた。一郎はびくりとし、思わずあたりを見回す。尋常ではない様子の悲鳴が、続いて複数聞こえてくる。

「な、なにが……」

情けないことに、声は震えていた。校庭まで様子を見に行くべきなのかもしれないが、身体が動かない。

放課後の小学校に変質者、危険な午後の小学校。等々、さまざま

まな文句が脳裏をよぎった。

しかし、ヨシコには慌てた様子はなかった。それどころか、ぎりりと歯噛みをし、

「ゾンガーイだわ!」

謎の単語を口にした。

「ぞ、ぞんがーい……?」

「ヨシコ! 大変チュピ!」

目を白黒させる一郎とはまったく異次元のテンションで、ヨシコのピンク色のランドセルから小動物が飛び出す。

「え、ハムスター?」

「失礼チュピ! チューピーチュピ! 空気読めチュピ!」

ハムスターらしき小動物は、つぶらな瞳でそう抗議した。ハムスターとの違いは、背でパタついている小さな羽だ。人語を操るというのもハムスター離れしすぎている。

「ヨシコさん、これはいつたい……!」

「チューピー! ゾンガーイが出たわ! 変身よ!」

ヨシコの目には、すでに一郎は映ってはいないようだった。聞き捨てならないセリフとともに、右手を高々と掲げる。

「了解チュピ!」

チューピーがぐるりとまわり、口を開ける。そこから、チューピー自身の大きさを完全に無視した、手のひらサイズのコンパクトが飛び出した。高く上げた手でそれをキャッチすると、ヨシコの身体が虹色に輝き出す。

「ヨシコ、行きます! チェインジ、メタモルマリリンパ!」

どこからともなく流れるバックミュージック。ヨシコの全身がシヤララランと光を帯び、彼女がゆるりと三回転する間に『変身』は完了した。

ピンクのトップスにデニムのスカート姿だったはずのヨシコの衣装は、いまやグリーンとオレンジのコントラストがまぶしい、ミニスカ仕様のヒラヒラに変わっていた。高い位置でまとめた短めのツ

インテールがふわりと揺れ、首もとには赤いブローチ。白い手袋とブーツはどちらもロングだったが、絶対領域はかたくなに確保。

「夢を照らす愛とか希望の星！ 美少女戦士ヨシコ、参上！」

決めゼリフを叫び、ポーズ。チューピーが肩に飛び乗り、光が消える直前に便乗してポーズをとった。

「チューピー！」

ここで、音楽も鳴りやむ。計算され尽くされた変身シーンだ。

一郎は、一ミリも動くことができなかった。

秘密、という単語が頭をよぎる。これがまさか、彼女の ひいてはグリセリン小学校の秘密ということなのだろうか。堂々と目の前で変身しておいて。

「ヨ、ヨシコ、さん……？」

そうこうしている間にも、校庭からの悲鳴は激しさを増す一方だが、ここははずすことのできないプロセスなのだろう。ヨシコはたつぷり十数秒ポーズをとり続けた。

「あたしはヨシコさんではないわ。美少女戦士、ヨシコ！ さあ、あたしが来たからにはもう安心よ！ 逃げて、一郎くん！」

どうやら、いま駆けつけたという設定らしい。一郎はよろめいたが、とりあえずつつこみは言葉にならなかった。なにはともあれ、ヒラヒラの衣装がヨシコに非常に似合っており、止める必要性は感じられなかったのだ。

「さあ、いくわよ！」

美少女戦士ヨシコは跳躍すると、校庭に向かって走り出す。

逃げるべきかと逡巡しつつ、結局一郎もあとを追った。

校庭では、巨大な勉強机が暴れていた。ぎよろりとした大きな目、そのすぐ近くにまで迫る口。飛び出した金属製らしき手足を振り回し、教科書を逃げまどう少年少女に投げつけている。

「な、なんだあれ……」

一郎は驚愕したが、グリセリン小学校の児童たちは驚きはしていないようだった。むしろ慣れた様子で逃げる姿も多い。逃げ遅れた少年少女は巨大机に捕まり、強制的に勉強をさせられていた。泣きながら教科書を読み上げるものや、鉛筆を走らせるもの、様々だ。「おーほほほん！ 放課後にさっさと帰るなんて言語道断！ 悪の組織ゾンガリーのゴールデン・ツリー様が、お勉強させてあげましてよ！」

巨大機の肩らしき部位に仁王立ちし、異様に露出の多い真っ赤な衣装の女性が叫ぶ。どこかで見たことのあるような顔だと思っもの、一郎はどうしても思い出せなかった。そもそも、ゴールデン・ツリーなどという名の人物に心当たりはない。

「さあ、よい子のみんな！ 復唱なさい！ ゾンガリーの心、ひとつ！ 挨拶を徹底しよう！」

ゴールデン・ツリーが叫ぶと、巨大机に捉えられている少年少女は叫び始めた。

「挨拶を徹底しよう！」

洗脳されている様子は無いが、身体の内は利かないらしい。無理矢理いわされているようだ。

「ひとつ！ 学校には休まず行こう！」

「学校には休まず行こう！」

「ひとつ！ お年寄りには敬意を払おう！」

「お年寄りには敬意を払おう！」

「く、なんて卑劣な……！」

ヨシコがぎりりと歯噛みした。一郎は真剣に考える。至極まっとうなことをいつてるような気がするんですが、とはなんとなくいえない雰囲気。

「今日も今日とて悪事をはたらくゾンガリー！ このあたしが来たからには、好きにはさせないわ！ 月に代わってとつとお家に帰りなさい！」

いろいろ混ざっていた。けれど一郎は、懸命に口をつぐんだ。

「来たわね、美少女戦士ヨシコ！ 毎度毎度アタクシの邪魔をして  
！ でも今回は負けなくてよ！ さあ、ツクエーン、やっちゃ  
いなさい！」

「ツクエエエエン」

ゴールデン・ツリーが叫び、ツクエーンという名らしい巨大机が  
吠える。投げつけられた教科書を、ヨシコはひらりと跳んでかわし  
た。

「勉強させようったって、そうはいかないんだから！」  
白熱のバトルだ。

完全なる置いてけぼり感をかみしめつつ、一郎はぼんやりと戦い  
を眺める。

「ヨシコ、このままじゃいけないチュピ！ ピッコリンソードを使  
うチュピ！」

鬼気迫る様子で、チューピーが叫ぶ。ヨシコはくるくるとまわる  
と、両手を空に向かって高く上げた。

「ピコピコー、ピッコリン！」

叫び声と同時に、またもや流れるバツクミュージック。虹色に光  
輝き、ヨシコの手にはハンマー状の武器が現れた。少なくともソード  
ではない。

中央には眩しいばかりのハートマーク、ハンマー部分は金属では  
なく、赤くやわらかそうな素材でできている。

「ピコピコハンマー！」

さすがに一郎は叫ばざるを得なかった。

「違うわ、一郎くん！ ゴルディオンのものよ！」

「それはそれで！」

ありなのだろうか。しかし、もはや一郎の感覚も麻痺していく一  
方だ。

「ふふん、そんなものであたくしたちに勝てると思ってるの？ ソ  
ンガイーは存外に強いのよ！」

「存外に」

一郎は唖る。なるほど、深い。

たしかに、ゴールドン・ツリーのいうことももつともだった。ピッコリンソードを手にしたところで、ツクエーンとのサイズの差は超えられるものではない。どうする、ヨシコ！ とかだんだんその気になってきて、一郎は手に汗握って美少女戦士を見守る。

「甘いわね、ゾンガイー！ 行くわよ！ 巨大化 ！」

ヨシコは、とんでもないことを叫んだ。

およそ美少女戦士らしくない効果音を響かせつつ、現実に巨大化していく。ズモモモモ。

「ヨ、ヨシコさ……じゃない、美少女戦士ヨシコさん、巨大化まで？ あの、一体、なんなんですかっ？」

どうしようもなくなり、思わず聞いてしまう。スルーされるかと思っただけが、巨大になったヨシコはにこやかに一郎を見下ろし、爽やかな笑顔を見せた。

「あたしの両親がね、昔流行ったアニメとかの大ファンだったのよ」「それだけでは超えられない一線を超えてますよね？」

まっとうな意見は、もはや意味を成さなかった。巨大ヨシコはピッコリンソードを構え、力の限り振り下ろす。

「ほとんど必殺！ ピッコリンアターック！」

ズシヤア ソードで切った的な音をたて、ツクエーンがまっぶたつに割れる。断末魔の叫びを残し、巨大机は砂へと姿を変え、校庭にはごく普通サイズの机と、転がり落ちたらしいゴールドン・ツリーとが残った。

「く……美少女戦士ヨシコめ！ 覚えてなさい！」

捨てぜりふもすっかりと残し、ゴールドン・ツリーは校舎へと逃げ込んでいく。

強制的に勉強させられていた少年少女も解放され、彼らはそろってヨシコに礼を告げた。ありがとう、美少女戦士ヨシコ。助かったよ、美少女戦士ヨシコ。等々。

「超、スッキリ！」

巨大ヨシコがポーズを決める。

「ええと……」

一郎は言葉を探した。なんといえいいのかわからなすぎた。ヨシコだけではなく、この学校内の全員の、手慣れた感じはなんなのだろう。

そのうちに、巨大ヨシコの首元にある赤いブローチが、ピコーンピコーンと鳴り出した。巨大ヨシコの身体が再び輝き、風船がしほむように通常サイズに戻っていく。

「さ、これでもう安心ね！ あたしはこれにて……ドロンッ！」  
「チュピ！」

そんな言葉を残して、校舎のなかへと姿を消す。それからすぐにランドセルを背負った花水木ヨシコが出てきた。

「だいじょうぶだった、一郎くん？」

あたしは何もしてないわ的スタンス。うん、と一郎はうなずく。それが精一杯だ。

「さあさあ、そろそろ下校時刻よ。みんな早く帰りなさい」

校舎から、赤いスーツの教師が顔を出した。児童たちは返事をしつつ、バラバラと帰って行く。

「さようなら、金木先生」

ヨシコもにこりと笑って、校門へ向かう。

「あ、さようなら、金木……かね……ゴールデン……？」

一郎は重大な何かに気づいたが、気づかなかったことにして、さっさと帰ることにした。

「今日は大変だったねー」

帰り道、何食わぬ顔で、ヨシコがいう。

成り行きとはいえ、途中までの帰路を一緒に歩くことになった一郎は、背筋をのばしてギクシャク歩いた。いろんな緊張に支配されそうだ。

驚くことはたくさんあった。彼女の秘密は、一郎の想像をはるかに超えるものだった。

しかし、だからといって、彼の気持ちが変わるということとはなかった。

むしろ、アリだ。

「あ、あ、あの、ヨシコさん」

意を決して、名を呼ぶ。

「なあに？」

「あ、あの……！ ほぼほぼく、やっぱり、あなたのことが……す、好きです！ それで、その……」

もじもじとうつぶむく。ヨシコはじっと、待っていてくれる。

一郎は、深呼吸をした。色々ありすぎて大変な思いをしたがだからこそ、いまなら、もう一押しできるはずだった。

「さっきの！ そ、その、『キレイだなんてむしろ』、の続きを、聞かせてください！」

真っ赤な顔で、いいきる。

ヨシコは、小首をかしげた。そんなこといったっけ、という顔。

それでも一郎は、辛抱強く待つ。

やがてヨシコは、ああ、と手を打った。

「あたしが一郎くんのことどう思ってるかって話？ キライなんかじゃないよ。キレイっていうよりね、むしろまったく興味ないっていうか、アンタだれ、って感じかな」

極上の笑顔だった。

「そ、そうですか」

なんかすみません、と一郎は謝った。

\*

私立グリセリン小学校。

この小学校には、だれもが知る、しかしだれも知らない、『秘密』がある。

帰宅した一郎に、今日はどんなことがあったのかと母親が問うたが、一郎は首を左右に振り、まったく全然何もなかったよ、と虚言を吐いた。

(後書き)

読んでいただきありがとうございます。

愛田美月さまのブログ、『美月のお家』1万ヒット記念リクエストとして「美少女戦士」をリクエストしたところ、大変素敵なイラストを描いていただいたので、それを元に物語を構成しました。

愛田さま、ありがとうございます!!

愛田さまのイラストは、

HP『美月の館』

<http://mitukinooutihengo.blogspot.s>

[hinobi.jp/](http://hinobi.jp/)

ブログ『美月のお家』

<http://mitukinoyakata.okoshiy>

[asu.com/](http://asu.com/)

等々よりご覧いただけます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5259/>

---

美少女戦士ヨシコ

2010年10月8日14時59分発行